

Φ150mm不明？

関西大学 社会安全学部 小澤 守

過日、大阪の街中を歩いていて気が付いた。歩道の一部があちこち仮舗装されており、その上に白ペンキで2本線を引いてガスだの水道だのと書いてある。ほとんどが寸法入りでΦ50とかΦ200などと書かれている。前者は直径50mmの配管であり、後者は直径が200mmの配管であること示している。その中でΦ150不明と書かれたものがあちこちにあった。歩道部分には歩道と平行に、あるいはビルなどがあると引き込んだり、歩道を斜めに縦断したりといった多種多様な配管が道路には埋まっているのである。ガス配管ならガス会社が、電話線なら電話会社がといった担当がばらばらだと、改修や再敷設工事でガス管を破った、水道管が破損したなどといったトラブルが引き起こされることになる。そしてまた歩道や道路の管理者は大阪市、大阪府、国道であれば国土交通省、と管理運営主体が異なり、当然ながら長期間経過した場合にはΦ150mm不明なる配管が出現するのである。

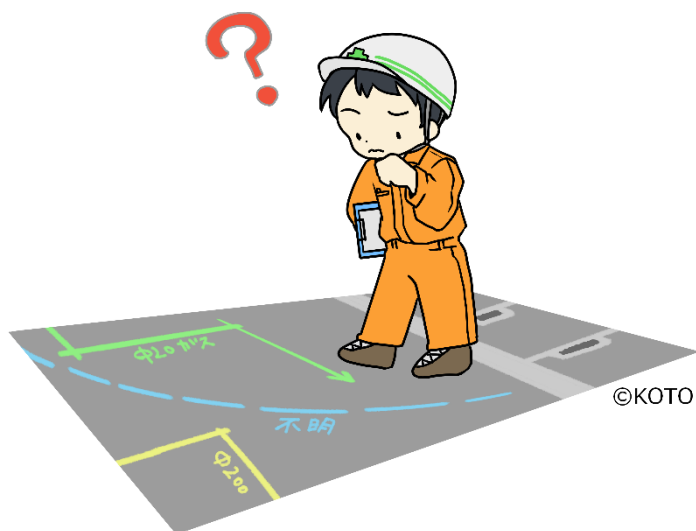
このような道路工事を行う場合、管理運営主体に当然ながらお伺いを立てることになるが、その管理運営主体はどこにどんなものがうずまっているのか、データベースを持っていないければならないはずが、実のところそうはなっていないように思う。

同様なことは長年月が経過した建物でも見られ、ガスや水道はともかくとして、電気配線は幾度もやり替えられ、追加され、現状はどうなっているのか、全く不明という事態に遭遇したことがある。著者は今をさる29年前に国立大から私立大学(肩書からどこかすぐにお分かりと思うが)に移籍した折、著者の研究室の電気容量は2部屋まとめて15Aであった。つまりパソコンや各種電気装置が研究室内に設置されていなかった時代の建物である。両方の部屋でワークステーションやプリンター、電気ポットなどを勝手気ままに利用すると、容易にブレーカが落ちる状況で、急に停電になると場合によってはデータが吹っ飛ぶ恐れもあった。そこで施設担当にお願いして部屋内に単独15Aのコンセントをつけてもらい、さらにコンピュータ用の無停電電源を買った。その折工事担当の方に、どこから線を引いたのか尋ねたところ、廊下に設置されている配電盤からとの答え。本当に独立して15A使えるのかどうか尋ねたところ、「たぶん」。そもそも全体の電気容量も、どこにどう配線されているのか、図面があるにはあるが、現状がどうなのか、全くわからないとの答えであった。建物の建設から50年は経過していなかったと思うが、この程度の年月が経過すると、電気容量はおろか電気配線図面も怪しくなっているようであった。

資料をきちんと残し、後々誰が見てもトレースできることが重要なのは言うまでもない。工事をして整備した、その時の状況だけで現状の配管なり配線などが分かるわけではない。道路に埋設する配管であれば、その配管がいつ埋設されたのか、鉛管なのか、鉄管なのか、寸法は、位置は、といった情報は確実に蓄積されておくべきもので、メンテナンスや経年劣化を評価する上でも非常に重要で、ましてや新しく歩道を拡充するとか、電柱を廃して電線を埋設するとか、共同溝を設置するとかいった作業には不可欠である。たかだか50年で不明

な配管が見つかるというのはどう考えてもおかしい。

我が国はそのような文書，図書，一般的にはドキュメントと言った方がいいかもしれない，それらを残らず整理して保存しておくということにかなり疎い。先ごろ問題になった公文書改竄などもその類である。行政文書のみならず埋設配管などのドキュメント類も，改竄できない形で（つまり日付入りの印刷物として）きちんと残しておくべきだということに対して，資料が膨大になるとか，保管場所がないといった反論はあるだろう。しかしその批判は現時点での状況判断にすぎず，後々の世代が改修したり，都市構造の変遷などを調査したりする場合にも非常に重要な資料になる。さすがに議会資料などは残していると思うが，今回のCOVID-2019でも，専門委員会での議事録，30万円，10万円の議論の経過など，丁寧に紙に印刷したドキュメントとして残しているのだろうか。かつてポーランドに学会で出かけた折，宿泊したホテルの前の道路工事で水道配管が破損され，ホテルの水が半日ほど出なかったことがある。聞けば旧体制下での図面がないとのこと。大阪も，いや日本も同じではないだろうか。



©KOTO